書評

野上久人氏著『万葉集作家と抒情』

河野頼人

私ごとの回想で恐縮であるが、「東歌——その抒情性——」は、「国文学攷」第二十三号の土井忠生先生還暦記念特集号（昭和三十五年五月）に掲載されたもので、当時大学院の学生であった私が、未熟な作業で御迷惑をおかけしてしまったのであるが、野上久人氏のこの論文の校正を担当したことを思い出している。

そしてこれに先立つものに「初期万葉——その抒情性について——」があるのであるが、これは学会の公開講演会でお聞きしたものであった。

さて、この度、私にもなつかしいこれらの論文も収め、テーマを抒情にしぼってまとめられた『万葉集作家と抒情』（桜楓社、昭和五十五年九月）の諸篇を拝読しつつ、当時の感銘をあらためて反芻していることである。

本書は、

(6)大伴旅人——孤老の文学——
(8)山部赤人——その清澄と端正——
(5)田辺福麻呂の歌の発想
(7)大伴家持——その憂愁——
(3)初期万葉——その抒情性——
(4)東歌——その抒情性——

と配列され、これに、

(1)万葉集の「うまし」「くはし」「うつくし」「うるはし」について——万葉集の文芸感情の一環として——
(2)「しろたへ」と「くれなゐ」——万葉集の色彩感について——

の二篇がつづく。

発表の順序は、各篇の頭に記した数字の通りであるが、このうち、(6)・(8)・(5)・(7)の四篇を「第一部　作家編」、(3)・(4)の二篇を「第二部　抒情編」、(1)・(2)の二篇を「第三部　特殊研究編」として括られている。

一貫して万葉歌の抒情をテーマに論じられた右の諸篇は、万葉歌を、表現に即して読むというもっとも直実な方法を駆使し、加うるに鋭い感性に裏づけられたみずみずしさを湛え、読みつつ歌のおもしろさを教えられ、何か心洗われる思いがすることである。

「あとがき」に、

「……なるべく実証的な態度で論じたつもりであるが、なお主観的独断に堕している点もあるであろう。作歌と研究の両面を志しているための不徹底や、また問題意識の浅さもあるかとおそれるが……」

と謙譲の言を述べておられるのであるが、この謙譲の言は別として、本書のみずみずしさには、すぐれた作家である氏の目の働きも忘れてはならないと思う。因みに、氏は、歌誌「世紀」を主宰。田中大治郎氏主宰「青炎」の主要同人。歌集に、『冬の意志』『青き氾濫』がある。

内容に入ると、先ず、特に第一部第二部と分けて編み、作家編を特立しているところに本書の意図を汲みとらねばならないと思うのであるが、私には、分けないでいいのではないかと思われた。というのは、私は、万葉の中に生まれ育っていく抒情の系譜を明らかにしようとされる本書を貫く一本の棒の如きものに強い感銘を受けるからである。又、初期万葉の抒情を考究された(3)を冒頭に、これに第二期に遡りうるとされる東歌の(4)をつづけた方が、個人の歌ではない東歌の抒情を、その系譜の中にどう位置づけられるのか、氏の体系を追うていくに理解し易いように思うからである。それは論文執筆の順序でもあり、氏の思念は(3)から(4)へつづいているのである。

又、第一部が、大伴旅人にはじまっている点については後述したい。

さて、「抒情」の概念については特に規定されたところはないのであるが、(3)の、舒明天皇の御製歌、有間皇子の歌を論ずる中に、「抒情の主体たる個我」(一一四・一二〇頁)、或いは旅人について、「衆と共にいながらひとりの個人的心情、個の意識にめざめた心情」(二一頁)という。氏の「抒情」を形成するものが何か、その手がかりの一つになると思う。

(3)「初期万葉——その抒情性——」からみていきたい。万葉集の時期区分の大よそ第一期に相当する初期万葉の抒情性を、舒明天皇の国見歌(巻一の二)、中皇命の献呈歌(巻一の三・四)、中大兄の三山歌(巻一の一三〜一五)、そして挽歌の有間皇子の自傷歌(巻二の一四一・一四二)、天智天皇崩御の際の倭姫皇后の御歌(巻二の一四七〜一四九・一五三)をとり上げ、例えば、国見歌について、国見という伝統から来る規制の中にあって、そこに描かれる自然は、

「もはや外からの単なる写生でなく、眼に映じた多くの中から作者が、呪的に抽出したもので……このような呪的抽出によって構成された心像世界こそ、初期万葉の古典的抒情を可能にしているものではなかろうか。」(一一五頁)

といい、有間皇子の歌について、

「一応呪的な伝統的な発想に従いつつも、自己の一切をかけて起ちあがろうとする姿勢のきびしさ……つまり作者の内面心情の声をそこに聞きうる……」(一二〇頁)

と、そして、その古典的抒情を、

「……素朴であるが、一種のととのった感じを持っており、従って単なる素朴でなく、ある規格に準拠したおちつき、余裕を持っていること、古朴な表現の中にどこかおっとりとした古典性、古代性が漂っていること、人間感情のはげしい奔騰に身をまかせるのでなく、むしろ一つの規格を守って外れまいとし、

そうしたはげしい感情をおしかくしたような表現をとってい

ることである。」（一二三頁）というのであるが、ここに到るに歌の表現に即して考察し――これが本書の全篇にわたって歌の味読の基本をなす方法であることは既述――、すぐれて鋭く説得的である。

(4)について。東歌の大部分を、飛鳥藤原時代以後で、特に藤原から奈良朝初期に位置づける。猶、(1)に、「東歌は時代的にみれば万葉第二期人麻呂の時代にまで遡って考えられよう。」（一七四頁）ともあった。これは、『万葉考』の古撰万葉六巻説の東歌の位置づけと相重っていると思うのであるが、東歌の抒情の開花の時期とも関わって問題となるところである。第二期にまで遡らせることについて、説明をいただきたいと思った。

歌が、支配者たちの社会的圧迫や搾取と苛酷な労働の日々をおくる東国農民の感情の捌け口となっているが、まだ、十分自覚的、意識的、個性的になりきっておらず、多分に民謡的な要素を含んでいて、一種の余裕を残しているといい、そして、互いに愛情を確かめ合う間に人間的な個我がめざめて来たと、男女交歓が、民謡の段階から抒情詩としての文学の段階へと移っていく契機となったというのである。

中で、「かなし」の語義が、愛欲の意からしだいに悲傷の意へかわっていっている点を、個我のめざめと関連してとらえられているところに共感する。「かなし」の語義を考えていくにあたって、例えば、横山英氏に「かなし(愛し)という語について」（『万葉私考』）という論文があったが、この論文の方法では「かなし」の語義が読む人によって動く危険があるのではないかと思ったのであるが、(4)の論文によって、「かなし」の解釈に一つの方向が与えられるのではないだろうか。(4)の論文やこれに先行する中川徳之助博士「万葉集の現実感情」（「文学探究」第二巻第二号）の驥尾に付して、私も小文を草したことがある（「万葉集東歌に於ける『かなし』の独自性にふれて」、「万葉集東歌に見える『かなし』の考察――その地方性闡明のためのこころみ――」、小著『上代文学研究史の研究』所収）。

そして(4)に、(3)の初期万葉につづき、かつそれに相対する地方の抒情について御教示いただくのであるが、

「こうした身近な周囲の環境に対し、矛盾的に自己を意識しそれに抵抗してゆこうとする歌は、中央都人の間にもしばしばみえるもので、それらが東歌にも影響を与え、東国人の間にもそのような自我がめばえたのだとも言える。」（一四四頁）

とある「東歌にも影響を与え」たのは、文脈からすれば、巻十一、十二の作者未詳歌の巻であるが、巻十一、十二の歌の抒情、又、巻十一、十二と巻十四の影響関係について詳論をいただくことが出来たらありがたいと思ったことである。

さて、次に、(6)「大伴旅人――孤老の文学――」であるが、旅人が、青春時代の営為たるべき作歌を老年にして始めている状態を、今日の状況と照らして注目されるとし、その理由の一つとして、時代がまだ若かった――一般にはまだ時代や社会が若く、矛盾の意識も乏しく、若くして個性の開花には遠かったといい、旅人の個の意識のめざめを、大宰府赴任に伴なう孤独の意識の深まりによる、かつ背景基底に老を意識した孤独であることを剔抉する。そして、

「それは一時に激発して消滅してしまう類のものでなく、冷ややかに燃える不断の情熱……そこに深化された精神、つまり心境的のものにまで高められた諸作が生まれてきているゆえん

……」（二六頁）

と、旅人の歌の本質をついておられるのであるが、しかし強いていえば、副題に「孤老の文学」とあるように、ここを主調とされているのであるが、旅人を他の面からも照射していただきたいと思った。

「内容や用語に離宮讃美の気持ちは見られるが、それにもまして個人旅人の孤独の姿勢が地模様として感取されないだろうか。……『老の孤独』を見てとることは少し無理かも知れない。」（二〇頁）

と、「老の孤独」とやや次元を異にするといわれる吉野離宮に御幸せし時の歌（巻三の三一五・三一六）や、取り上げられていないのであるが、種々評価のわかれている讃酒歌（巻三の三三八〜三五〇）も孤独感の問題に関わるところがあると思うのであるがこれらについて、又、孤老の意識は旅人以前にはなかった、そして、「孤独が、単なる一時的なものに終わらず、旅人の老の心境的なものにまで高められている」（二四頁）ということに関連して望郷の言を述べれば、世間の住り難きを哀しむ歌（巻五の八〇四・八〇五）、老身病を重ね、経年辛苦し、児等を思う歌（巻五の八九七〜九〇三）の山上憶良にも言及してほしいと思った。

猶、第一部は旅人を冒頭におくが、主テーマの抒情を系譜の中に位置づけるためにも、柿本人麻呂（本書の宮廷歌人の系譜に登場）や旅人以前の諸歌人も対象に取り上げていただきたいと思った。

ところで、旅人を論じて、時代が、まだ「矛盾の意識も乏しく」（九頁）とあるのであるが、(4)の論文の、既に引用した一四四頁に「矛盾的に自己を意識し……」とあることに相対してみる時、これと東歌を万葉第二期人麻呂の時代にまで遡らせて考えることとの間には、猶説明が必要であると思う。

次に、(8)「山部赤人——その清澄と端正——」。赤人の全般について論じる。人麻呂の影響下にあるが赤人的な特色を持っていることを、従駕歌、富士山詠等の項目に分けて説き、

「赤人の懐古の作（注・巻三の三二二〜三二五・三七八・四三一・四三三）には、従駕の作に比して一層自在な精神があり、清澄端正な表現ながら、主観の流露がみられ、より抒情的……」（五一頁）

「これらの羇旅歌（巻三の三五七〜三六三）は、赤人としてはある程度の主観の投影を感じ……抒情的……」（五四頁）

と、宮廷歌人としての枠内にあって、先蹤の歌とどのような関わり方をしているかを個別に詳細な検討を加え、赤人の文学の自由な想念の動きを描いて余すところがない。

ただ、(8)で「抒情」の語が既定のこととして頻出することと、普通もっとも赤人的とみられている「文雅な自然詠」についての項目があるが、ここに引用の巻八の一四二四〜一四二七の四首抒情についても説いていただきたかったことである。

そして、(5)「田辺福麻呂の歌の発想」は、福麻呂を、

「人麻呂などの職業としての宮廷詩人で流れは赤人・金村などに受けつがれ、さらに福麻呂に至ってその残映をとどめている……」（五九頁）

と位置づけ（(8)では「宮廷歌人」とある）、福麻呂の作歌が、当時の政治上、社会上の不安を反影、

「赤人のように自然讃美のみに終始せず、新京への堅固さを祈り、未来への強い願望や希求をうたわずにはいられなかったようだ。」

といい、ここに、「時代人の強い要求が存した」(七三頁)と。注意すべき大切な指摘であると思う。ついては、猶、時代人の要求がいかに個人の抒情に昇華されていっているのかお聞きしたいと思った。それから、福麻呂がそうだと断定されているわけではないが、赤人を論じた(8)にもあった「宮廷歌人(詩人)」について、氏の見解をおうかがい出来たらとも思った。

(7)「大伴家持——その憂愁——」は、その生涯を考え、越中守時代の家持が、「内心の真情が、同時に悲緒や欝結の緒や愁緒」(九五頁)を歌い、巻十九の四二九〇〜四二九二では、都に帰って「楽しかるべき春の日に、憂いにとざされている家持の歌の世界は、万葉の中でほかにだれも歌っていない」(一〇三頁)境地を拓いたことを論じておられる。ここにも見事な鑑賞が、歌の味読の上に展開されていることに興奮をおぼえるのであるが、

「すでに開花した人間の持つ感傷や憂愁をふくんだ、繊細にして清純な抒情……」(八七頁)

と、これは家持の初出作、天平五年十六歳の時の、〈振りさけて若月(みかづき)見れば一目見し人の眉引思ほゆるかも〉(巻六の九九四)について述べられたものであるが、「すでに開花した人間の……」と「すでに」といわれ、家持の抒情を万葉の抒情の系譜の中に位置づけようとされていることには十分納得出来るのであるが、九九四に関しては、これを天賦の資質として評価することが出来るか、「感傷や憂愁をふくんだ……抒情」をこの歌に認めるのには更に説明が必要ではないかと思った。家持個人の中にも、万葉抒情の歴史——系譜と同じように、先人の歌風を学び自分の抒情を形成していった過程があるのではないか。或いは、習作という先入主が私にあるからであろうか。猶私も考えてみたい。

第三部の二篇は、抒情表現に深く関わる形容詞と色彩語を考察されたもの。ここにも、ことばに即し、歌を心読する氏の着実な方法論がある。加えて、本書所収の諸篇に、私は、読みの深さが文学研究にいかに大切であるかをお教えいただいたと思う。それにしても、読みの深さを裏づけている氏のすぐれた感性には羨望さえおぼえたことであった。

そして、猶、もっと多くの歌人について、又、東歌に対する巻七、十、十一、十二、十三等の作者未詳歌の諸巻についても是非御研究をおまとめいただきたいと併せてお願いしたいと思う。

以上、蕪雑な、かつ読み誤りも多いかと忸怩たるものがあるが、紹介と私見を述べて来た。失礼な言説はお詫び申し上げ、一層の御加餐を心より祈念して筆を擱く。

——北九州大学文学部教授——